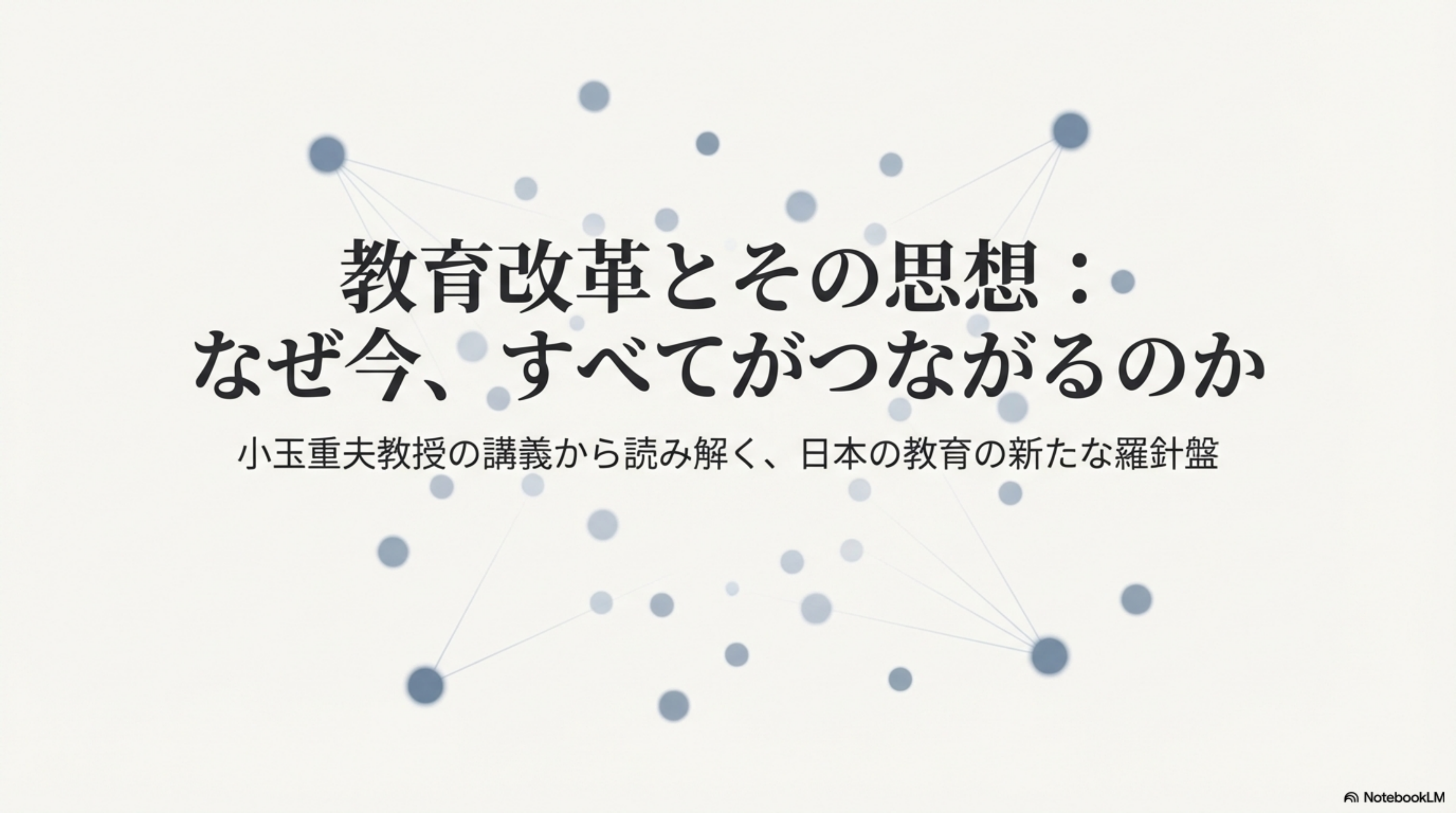


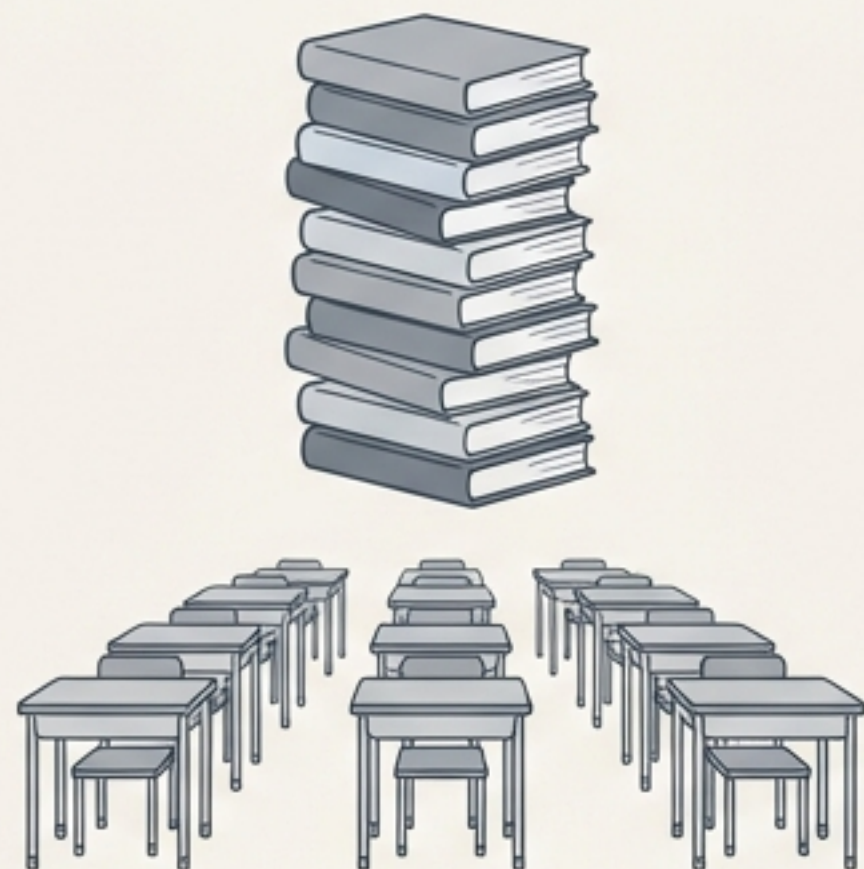


教育改革とその思想： なぜ今、すべてがつながるのか

小玉重夫教授の講義から読み解く、日本の教育の新たな羅針盤

日本の教育が長年抱えてきた、見えざる「壁」

高校までの「学習」



教育は受験勉強に特化

深刻な断絶が存在する

大学からの「研究」



初めて「研究」に従事

大学入試という巨大な壁が、二つのフェーズを分離し、知的好奇心の自然な発達を阻害してきた。

その「壁」を壊すため、連動した改革が始まった

大学入試改革

大学入試センター試験を廃止し、
「大学入学共通テスト」を2021年1月より実施。

新学習指導要領

幼稚園から高校まで、すべての学校
段階で改訂。

アクティブ・ラーニングの推進

「主体的・対話的で深い学び」を教育課程の中心に。

高大接続

改革の核心は、新たな「学力」の定義にある

旧来の重視点

新たな学力観：学力の3要素



知識偏重から、3つの要素を統合的に育成する教育へ。

教育のOSが変わる：「ツリー」から「リゾーム」へ

ツリー型 (The Tree Model)



学問的知識がトップダウンで伝達される、
単一の正解を求める目標指向モデル。

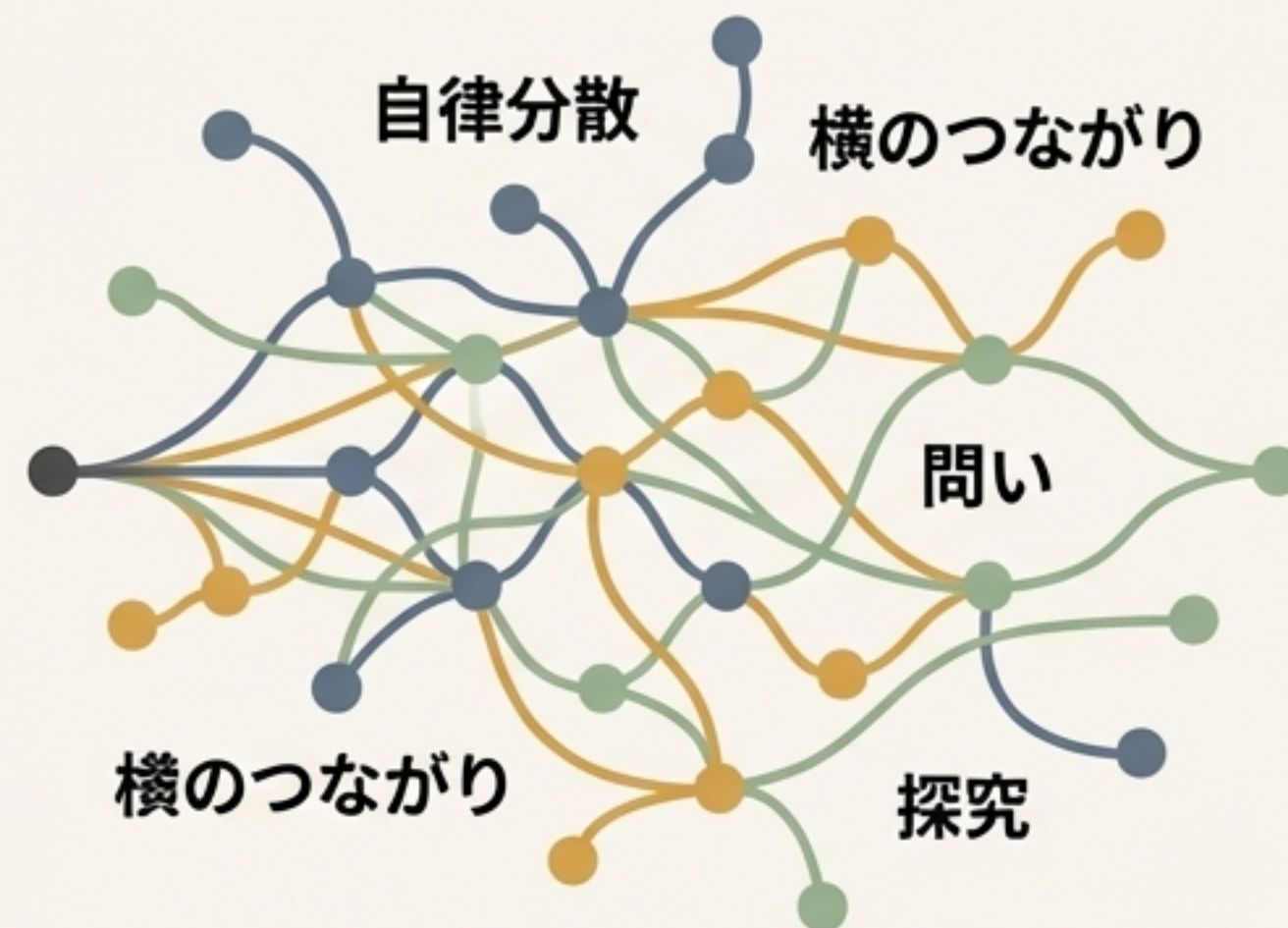
リゾーム型 (The Rhizome Model)

垂直統合

上意下達

正解

学習



学校と社会が水平につながり、自律した市民を育てる、
答えのない問いを探るプロセス指向モデル。
「社会に開かれた教育課程」

最大の変化は「問題を解く」から「問題を考える」ことへ

問題を解く

前提：どこかに答えがある

目的：既存の正解を見つける



問題を考える

前提：正解が存在しない

目的：多様な視点から複雑な
問題と向き合う



教育改革の重心は、前者から後者へと移行することにある。

「探究」とは、予定された軌道から「それる」勇気である

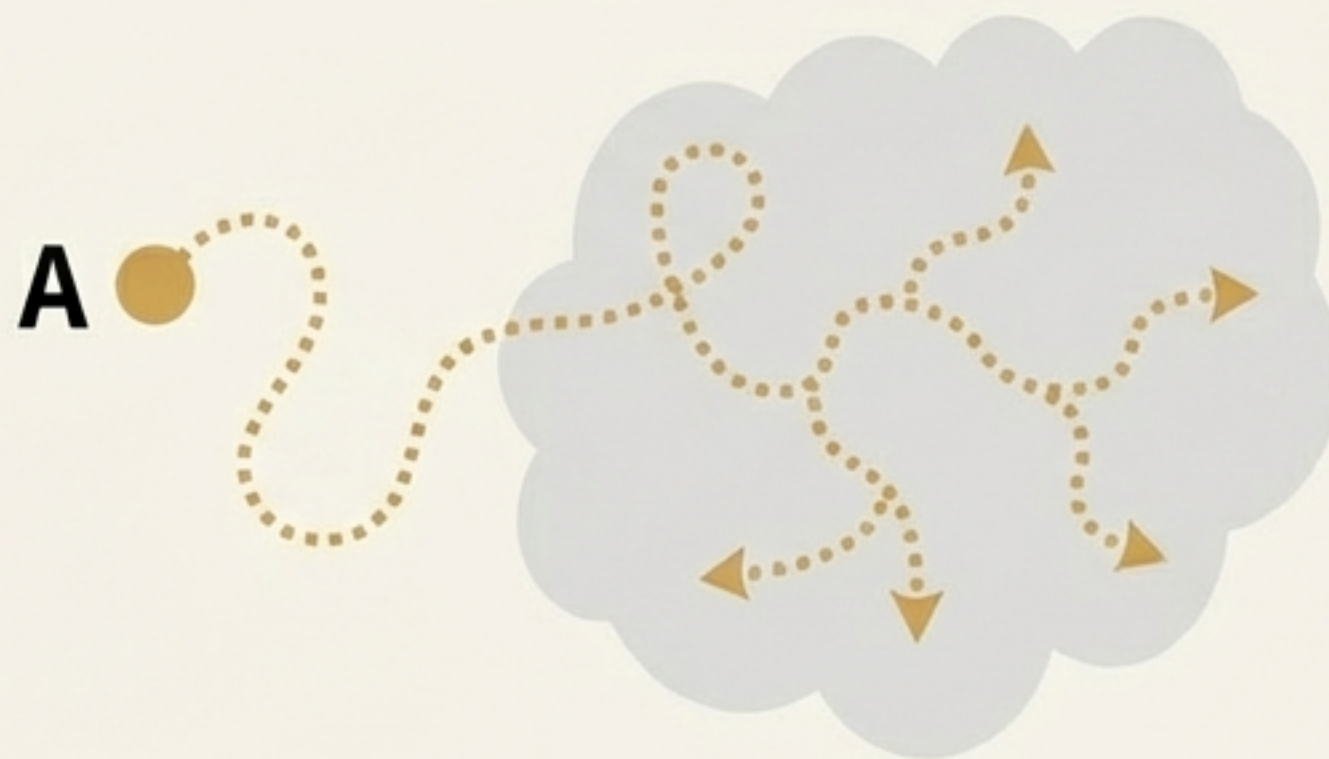
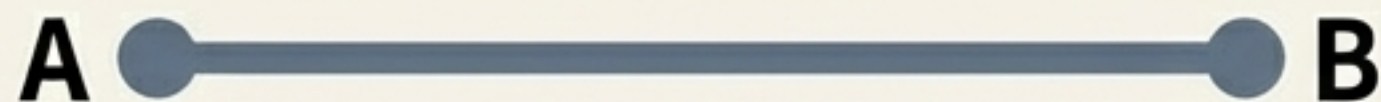
板倉聖宣 & the 'Shortest Path'

「科学とは、
解ける問題を解くことだ」

戸倉美都子 & the 'Meandering Path'

「目的物が霧散し、
あれこれと歩き回るような探求」

効率的な『解』の追求から、豊かな『問い』の探検へ



実践の現場から：軌道をそれることで、学びはより深く、豊かになる

お茶の水女子大学附属小学校「てつがく創造活動」の実践報告より

Case 1: 釣りから化石へ



5年生のグループが釣りのプロジェクトで行き詰まる。しかし、哲学の時間で培った対話と思考を通じ、プロジェクト全体を化石採集へと自ら方向転換させた。

生徒主導の軌道修正が、新たな熱意とより深い学びにつながる。

Case 2: 羽田から成田へ



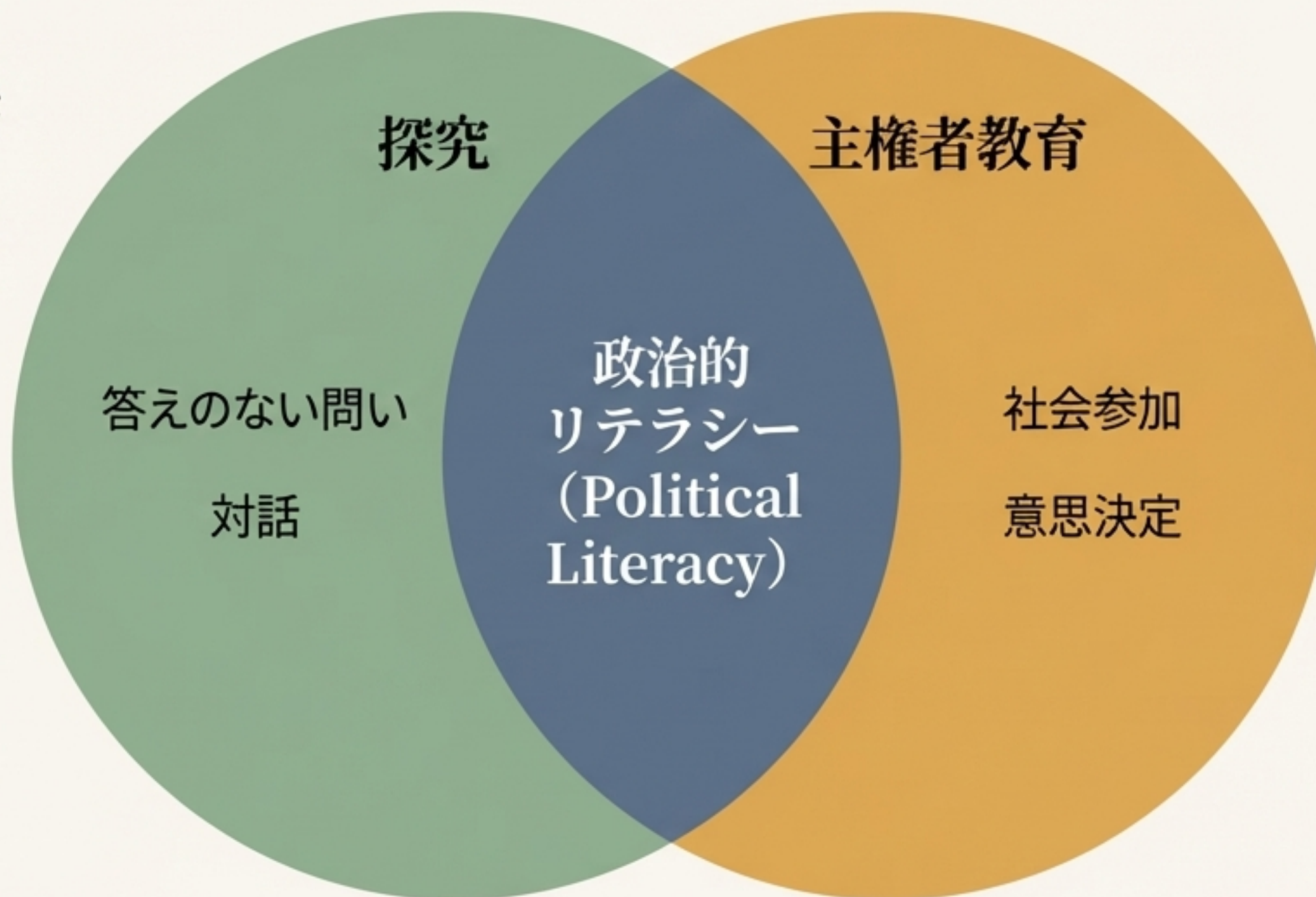
「おもてなし」を学ぶため羽田空港を調査したグループが、成田空港への好奇心を抱く。教師は、生徒を本来のテーマに引き戻すよう指導した。

教師の振り返り：生徒の自発的な好奇心（成田への脱線）を後押しすれば、さらに豊かな学びが生まれたかもしれない。これは教育者にとっての挑戦と可能性を示す。

「探究」は、自立した市民を育てる「主権者教育」と共鳴する

Social Context

2016年、選挙権年齢が18歳に引き下げられ、実質的な主権者教育の必要性が高まる。



The Connection

主権者教育は、社会科だけの課題ではなく、学校全体の責務である。その核心は、複雑で正解のない現実社会の問題に取り組む『探究』のプロセスそのものである。

政治的リテラシーとは、対立する論争から逃げず、争点を理解する力

旧来の誤解：『政治的中立性』

生々しい政治的トピックを避けること。
(1969年の文部省通知が背景)



新しい理解：真の『政治的リテラシー』

価値観が衝突する『なぜ』を理解し、
対立の争点を特定する力。



教育とは、論争を避けることではなく、論争に正面から向き合うこと。

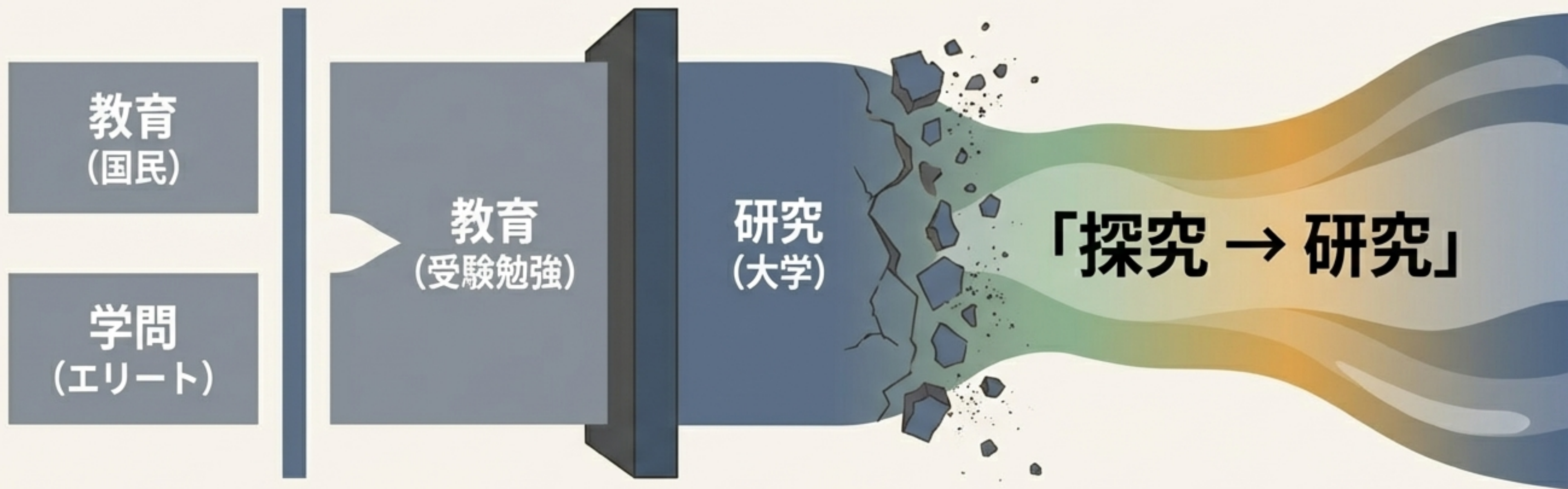
2015年、旧通知は廃止され、具体的な政治事象の積極的な活用を促す新通知が出された。

目指すのは「教育」と「研究」の壁を壊し、「探究→研究」へつなぐ未来

明治～戦前

戦後～2019年

これからの時代



「教育と学問の区別」

「教育と研究の分離」

幼児期の探究が、
大学の研究へと自然につながる。

幼児期の「探究」が、 大学の「研究」を変革する力になる



この変革は、保証されたものではない。その成功は、初等中等教育の現場に立つ教育者一人ひとりの実践にかかっている。最後の壁を壊し、知の未来を形作るのは、我々の使命である。